



今回の問題文は下記の通りでした。

〔問題〕

- (1)サルトーリによる「政党制の分類」について、480字以上で説明せよ。
- (2)今から20年後の日本の政党制（国政レベル）は、サルトーリの政党制の分類にあてはめると、どのようなものになっていると考えるか。具体的な根拠を示しつつ、論理的に予想しなさい。ただし衆参両院の選挙制度は変更されないと仮定する。

〔注意事項〕

- ◇(1)に対する解答が480字（解答用紙で16行）に満たない答案は、(2)に対する解答にかかわらず0点とする。なお字数の計算方法については下記の〔解答用紙の使い方〕も参照のこと。
- ◇箇条書きの答案は0点とする。かならず文章形式で解答すること。
- ◇採点に際しては「講義の内容を踏まえているか」「論理的な説明になっているか」を重視する。
- ◇誤字・脱字・文章表現の誤りなどは、すべて減点の対象とする。必ず「見直し」をすること。
- ◇解答を書ききれないときは、用紙の裏に続きを書き、それでも足りないときは、挙手して2枚目の用紙を受け取り、さらに続きを書くこと（2枚目にも記名を忘れないように）。
- ◇この問題用紙は持ち帰ること。

〔解答用紙の使い方〕

- ①「見出し」をつける場合、そのつど、用紙の1行ぶんを使うこと。なお見出しに関しては、実際の字数にかかわらず、ひとつあたり1行（＝30字）と計算する。
- ②「図表」を使う場合、用紙の16行目以下（点線より下の部分）に記入すること。また図表のなかの文字は、用紙のマス目に揃える必要はない（自由な大きさで記入してよい）。
- ③その他は、大学入学までに習得してきた「原稿用紙の使い方」に従うこと。字数の計算も、一般的な作文や小論文と同じ基準に従っておこなう（例：段落冒頭の1字下げによる空白や、段落末尾の空白部分も字数に含める）。
- ④以上の①～③に関する質問は受けつけない。ただし使い方を誤っても、減点の対象としない。

1. 答案の作成方法

最初に「今回の試験では、どのような手順で答案を作成すべきだったか」について、講義でも説明した「論文答案の作成方法」に即して、検討することにします。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

今年度の設問は、従来より複雑で、2つの、全く性格の異なる小問で構成されています。(1)は「サルトーリによる政党制の分類」を説明するだけです（後述のような注意事項はありますが）。一方(2)は、現実の日本政治を観察したうえで、それが20年後にどのように変化しているかを予想し、さらにその予想に対して、サルトーリの理論モデルをあてはめて議論することが求められています。当然、(1)についての十分な知識と理解がなければ、(2)について適切な解答を作ることは不可能です。

また(1)についても、3点ほど気をつけるべき点があります。どれも「あたりまえ」のことですが。

ひとつめは当然ですが「解答者であるあなた」が独自に考えた「政党制の分類法」を幾ら書き並べてもダメです。「サルトーリが提示した分類法」を、正しく説明しなければなりません。

つぎに、解答は「講義の内容を踏まえている」必要があります。講義で紹介した参考書などでも、サルトーリの政党制は言及されています。しかし解答に際して要求されているのは「講義でその点についてどのように説明されたか」です。したがって自分自身の認識や、他の教科書に書かれていたことを記しても構いませんが、少なくとも講義の中で言及されたことには触れなければなりません。

最後に、答案は480字以上でなければなりません。注意事項の最初に明記したとおり、この条件を満たさない答案は、自動的に0点となります。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

解答に含むべき「論点」については、講義レジュメの38～39ページを参照して下さい。答案では、これらの内容を順序立てて記述すべきですが、そのさいのポイントは「いかに取捨選択するか」でしょう。いろいろと細かいことを書き並べると、全体の答案構成が曖昧になりますから、瑣末な論点は思い切って割愛すべきです。他方で、重要なポイントを書きおとすと大きく減点されますから、そこにも細心の注意が必要です。最終的に「過不足のない」答案を作るためにも、ここで時間を使って「書くべきこと」「書くべきでない（不要・無駄な）こと」を精選して下さい。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

つづいて「何をどのような順番で書くか」「どこで段落分けをするか」「どの論点にどの程度の字数を使うか」などを考えます。これらの諸点についても、答案を書きはじめる前に、時間をかけて検討しておくことにより、最後にできあがる答案の「読みやすさ」や「全体としてのまとまり」、あるいは「論点ごとの分量のバランス」が、まったく違ってきます。反対に、これらの検討をおろそかにしたまま、漫然と答案を書きはじめてしまうと、「思いつくままにダラダラと書き並べたような答案」になりますので、高い点数（評価）は望めなくなります。

④実際に答案を書く。

（省略）

⑤きちんと読み直し、おかしい所がないかチェックする。

- I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずですが。しかし残念ながら、誤字や脱字を理由に、減点した答案も少なくありませんでした。
- II. また「日本語として意味が通らない答案」も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。こちらも当然、減点対象となります。

いずれにしても重要なのは、「問題文を見て、その場で思いついたことをダラダラと書き並べても、0点（これは比喻ではなく、本当に0点です）しかつけられない」ということです。あくまでも政治学入門という、特定の科目の最終試験ですから、「もんだいぶんをよんで、じぶんのかんがえたこと」を書くだけでは、合格点は絶対に取れません。

2. 最終試験の採点

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。

→前記「答案の作成方法」に記した通り、「講義の内容を踏まえて」「480文字以上で」解答していないものは、そもそも採点の対象にはなりません。

II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。

→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案は、大きく減点しました。また、段落わけがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、次回から「答案構成」をきちんと考えたうえで、解答を書き始めるようにして下さい。

また(2)についてですが「根拠はないが、たぶんこうなるだろう」などという、論理性皆無の答案はいけません。「こうなるだろう」と主張するからには、なんらかの根拠が必要ですし、それを文章としてきちんと示していない答案には、低い評価しか与えられません。

III. 分量のバランスがとれているか。

→たとえば「一党制」ばかりに紙幅を割き、他の6つの政党制については、それぞれ1行で終り、というのではいけません。つまり、それぞれの論点の分量が、バランスよく配分されていない答案についても、減点の対象となります。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

I. 必要な論点が揃っているか。またそれぞれの論点について、きちんと説明されているか。

これについては、講義レジュメに挙げた（あるいは私が口頭で説明した）サルトーリの政党制の分類について、どれくらい網羅しているかが重要です。

具体的にいうと「7分類のそれぞれの特徴」と、「それぞれの類型に当てはまる国の例」を述べるだけでは不十分です。それでは合格ラインには達しても高い評価にはなりません。高得点を得るためには、「サルトーリはどのような基準で政党制を分類したか（政治的に意味のある政党の数と、政権をめぐる競争が存在するか）」について説明し、さらに「政党制の定義」やデュヴェルジェによる政党制の分類との相違などにまで、触れる必要があります。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は60分ありますから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。

また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下ります。「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなり、全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。また書き終わっていない「未完結の答案」についても、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

III. 「基本的なミス」を犯していないか。

たとえば「政党」の意味そのものが判っていない答案に、合格点をつけることはきわめて困難です。また、それぞれの類型の内容や特徴を、根本的に誤解しているような答案も、基本的な知識に欠けていると判断して、大きく減点しました。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、それぞれ減点しました。

こう書くと必ず、「読めればいいのではないですか」といいます学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。

またもうひとつ、「レジュメ形式」や「箇条書きの答案」が、複数枚ありました。「論述式答案の書き方」でも明言したとおり、大学の試験で「論述」を指定された場合、基本的にレジュメ形式や箇条書きは認められません（一文ごとに必ず段落変え＝改行しているものも含む）。これらは形式違反の答案として、大きく減点しています。そのような答案を書いた記憶のある人は、高校時代の「小論文」を想起して、あのような「論理的な段落わけと、内容的な起承転結のある」文章を書くようにしてください。

④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでS評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にSがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、メールで連絡をもらえれば、随時対応します。私のメールアドレスはウェブサイトを書いてありますので、そちらに連絡をください。

3. 成績分布

①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布（政治学入門A・B合算後）

S : 14.7% A : 10.8% B : 14.3% C : 5.0% X : 19.7% F : 35.5%

②最終試験受験者における成績分布（同）

S : 22.8% A : 16.8% B : 22.2% C : 7.8% X : 30.5%

4. 解答例

次ページ以下を参照して下さい。なお、以下に示すものはあくまでも「解答例」であって、この通りに書かねばならないわけではありません。とくに2については、いろいろな予想があり得る以上、そのぶん、さまざまな解答例が存在するはずですよ。

(2)西暦2038年の日本の政党制

私は自民党を中心とした「一党優位政党制」(ただしサルトーリの定義とは異なり、自民党に小政党を加えた連立政権)になっていると予想する。まず20年後を予想するため、逆に20年前(西暦1998年)の日本を振り返ってみる。当時の日本は自民党を中心とした連立政権の時代であった。野党は「反自民」を掲げるものの、具体的に自民党(親米と経済中心主義)との政治路線の違いを明確にできず、有権者からの十分な支持を得られなかった。その後、20年のあいたに、いちどだけ民主党が自民党から政権を奪ったものの、その後の3年間で、国民からの信頼を大きく損なってしまった。

この20年(あるいは自民党が結党した1955年以来)の歴史を振り返ってみると、そこに感じられるのは「自民党の強靱さ」と「対抗する政治勢力の脆弱さ」である。自民党は1993年に分裂し、政権から顛落したものの、翌年には政権に再び咲くことができた。2008年にも民主党に政権を取られたが、野党となった自民党は、3年でふたたび政権を取り戻している。この「強靱さ」は、おそらく今後もつづくであろうから、2038年の日本でも、自民党は、政権獲得競争の主演を務めているであろう。

他方、自民党に対抗する勢力は、これまで一貫して「脆弱」な存在に過ぎなかった。自民党が支持率を落としたときも、十分な受け皿となり得ず、ときおり政権を獲得したときも、すぐさま内紛を起し分裂してしまう。これではアメリカのような二党制になりうる見通しが立たない。以上の推論から、西暦2038年の日本は、おそらく自民党が政権の中心を占め、立場の近い小政党と連立政権を組むという、2017年現在と同様の政党制になっていると予想する。

以上